



「歌一筋に生きて」

くに い す み こ
國井スミ子

1935年(昭和10年)
栃木県大田原市生まれ
船堀在住



情操音楽教室

結婚した翌年の昭和32年、主人と二人でバイオリンとピアノと歌を教える音楽教室を始めたんです。音楽を通じて心豊かな人間になるような教育をしたいと、名前を「情操音楽教室」と二人で相談して決めました。

わたくしたちは武蔵野音楽大学の同窓生で、二人とも子どもが大好きなんです。そのころ、ピアノ教室はありましたがバイオリン教室はなかったですから、楽器店からの紹介が多く、遠くまで出張もしていました。

情操音楽教室の演奏会は、毎年3月に開催していて、来年で55回になります。始めのうちは四谷駅前の主婦会館や、当時は神田駿河台にあった日仏会館などでしたが、昭和58年に江戸川区総合文化センターができてからは区内で。現在はタワーホール船堀で、わたくしのコーラスのサークル、主人のハンドベルのサークルやバイオリンの孫弟子さん、娘夫婦の音大の生徒さんの発表が中心です。

昭和63年から18年間、60歳を超えた方々が学ぶ、江戸川区くすのきカルチャー教室でコーラスの講師をしていました。「こんな老後があるなんて」ってみなさん喜んで、卒業してもサークルを作って続けているんです。80、90歳の方もいらっしゃいます。喉は鍛えれば衰えない。高い「ソ」まで出しますよ。ピアノを77歳から始めた人もいます。始めるのに遅いということはないんです。聴くだけよりやれるってことは、すごい自信になりますよね。

20年くらい前から、グリーンパレス子ども教室「キンダーコール」の講師もしています。就学前のお子さんが1年間、合唱や合奏を楽しく学ぶ教室です。主人に伴奏してもらい、「大きな栗の木の下で」をみなさんと手拍子しながら歌ったり、子どもさんが2、30人でお父さんやお母さんと「かえるの合唱」を輪唱したりします。「お母さんしっかり歌ってね、お子さんに負けないで」とか言って。

美しい詩の童謡や唱歌はいいですね。ほんとに、これからは歌い継いでもらいたいという思いで、みなさんと歌っているんですよ。合奏では打楽器の他にハンドベルもします。子どもさんたちもよく覚えてくれて、3月に修了公演があるんですよ。みなさんが喜んでくれますので、張り合いです。

ふるさと大田原から音楽の道へ

栃木県北東部の大田原町(現大田原市)で生まれ、女5人、男2人きょうだいの下から2番目、みんな歌が好きでしたね。母はご詠歌や民謡、踊りをやっていました。父は鉄工所を経営していて、とても働き者でした。わたくしは小さい時から、「聴かせて」って言われると、堂々と、ものおせず歌っていましたね。

小学校の時は、他の学校の先生たちがみえた時とか、遠足で雨に遭った時に歌わされましたよ。運動も好きで近所の川で泳いだり、スキーをしたり、ドッジボールをすると最後まで残りましたよ。中学校の音楽の先生が、わたくしの声に合った曲を選んでコンクールに出してください、放課後にピアノも教えてくださいました。音楽の道に進みたいと思ったのは、その時ですね。

県立大田原女子高等学校に入った年、武蔵野音大新卒の先生がみえたんです。大田原には男子校の県立大田原高校もあって、カラコンと、高下駄を履いて歌いに来るんですよ。男子がいない女子校ですから、窓からみんな首出してね、「わあ、男の人が通っている」とかね。混声合唱をやり、ソプラノをソロで歌わせてもらいました。それで、先生が「音大に行きなさい」と。

先生が勤めるなら頑張ろうかなと思いましたね。一生懸命、学校のグランドピアノで練習しました。大田原は、よく雪が降る寒い所で、手とか足が冷たくて。手を揉みながら温めての練習でした。朝早く自転車で行って、学校が始まる前に練習しました。

東京にも月2回くらいレッスンに通いました。授業が終わって、お掃除もみんなと同じにやってから、電車で2時間くらいかかってね。親はもう、それは覚悟だったんじゃないですか。子どもが大勢いたのに苦勞してね。歌を楽しんでいるわたくしを見て、音楽の道に入れてくれたんでしょうね。それこそ「頑張らなくちゃいけない」って思いましたね。

昭和28年、練馬区の武蔵野音楽大学の短大に入学。寮生活は4人部屋で、みんな仲良しで楽しかったです。練習、練習の毎日でしたが、生徒の数ほど練習室が無くて大変でした。朝は7時前に校門が開きましたら、突入して確保しないと練習できないんです。電球が付いてなくて、みんな

自分の電球を持って行って、夜は9時くらいまでね。食事に行く時は誰かに貸しとして、それでまた使うとか。ピアノも弾きたいし、歌もイタリア語で歌わなくちゃいけないから。

練習室が取れない時、貸してくれたのが主人です。それから練習の伴奏をしてくれるようになって、上手でしし相性も良かったんですね。主人の家は仙台の厳しい家庭で、独学で音大に3回も合格したのに、「男が音楽なんか駄目だ」って言われて、やっと4年目に授業料だけは出すと許してくれたそうです。

わたくしは卒業して、江東区深川の文化教養学園という幼稚園に就職し歌を教えました。舞台上立つより教育、それも小さい子が好き。だから幼稚園は楽しかったですね。

100円会費の結婚式

わたくしは結婚を決めるのに少し時間がかかりましたけれども、園長先生たちが「早い方がいいよ」って。決め手は主人の優しさですね。



◆朝日新聞(昭和31年1月29日)に掲載された音楽結婚式の様子

式は明治神宮で挙げましたが、披露宴は幼稚園の音楽堂。そのころ、冠婚葬祭を簡略という運動があったんです。「派手にやるより、みんなで心を込めたお祝をしよう」って全部同僚が揃えてくれました。会費が100円、コーヒーとケーキだけの会に、みんなが駆けつけてくれました。次の日、朝日新聞に、「豪華なのは演奏だけ 友情の音楽結婚式 新生活運動のリズムに乗って」って大きく載ったんです。

両親は大学が終わったら帰ってくると思っていたでしょうから、寂しそうでした。結婚して親の援助は断りましたが、主人の実家は食べ物をよく送ってくれて、実家の母もよく来てくれました。住まいは園庭横の宿舎で、子育ては二人でした。主人はよく子守をしてくれましたね。園児のお母さん方もよくみてくださってね。今でもコンサートを楽しみに来てくださいます。

二人目が生まれて、わたくしは幼稚園を辞めたんです。園児のお母さんから「家が空いているから使って下さい」って言われて、江東区東陽町へ引越し、そこで、本格的に教室を構えたんです。子どもさんがいつも50人以上習いに来ていましたね。

江戸川区に移ったのは昭和43年、新聞の住宅の広告を見て来て、「ここがいいわ」って一遍で決めちゃった。荒川と中川に架かる船堀橋は、まだ木の橋でした。今の橋は、昭和46年に少し上流に架け替えられたんですよ。

音楽一家と言われますが、主人とわたくしが音楽をやったので、自然発生的に今があります。長女が3歳のころ、風鈴の音を聴いて、「ラの音で鳴ってる」と言いまして、ピアノで確認したら「ラ」。これは絶対音感なんですね。娘二人の将来はわかりませんでした。一応、わたくしたちと同じ道にと希望しました。音楽のことは他人に預けてと思って、中学から上野学園の音楽科に。良かったことは、娘たちがすんなり受け入れてくれたことです。楽譜は重いし、通うのは大変だったと思います。

その娘たちもプロの音楽家になって、二人のお相手は、オペラ歌手とピアニストなんですよ。毎年11月に家族6人で、「くにいファミリーコンサート」を開いて、今年で11回目です。会場は総合文化センターで、舞台衣装はいつも娘が用意してくれるんです。

音楽は素質だけでは駄目で努力だと思います。一人ひとりで練習して、自分を磨く。家族と一緒に練習したり、感想を言い合ったりはしないんです。みんな音楽に対する考えもそれぞれですから。練習も主人がしている間、わたくしは用事をしていて、終わったと思ったらわたくしがするんです。

家のことも分業ですね。得意のほうをどんどんやってもらって、それをありがたく受け入れます。主人は几帳面で、わたくしもやらなくちゃと思っていることは真っ先にやる。テレビを見るのも惜しいですよ。別にそれが苦とも思わない、疲れもしない。音楽に携わっていれば幸せ。

仲良しの秘訣は立ち入らぬこと

今も仕事は月に20日近くあります。授業の下見と伴奏の練習を必ずちゃんとやって明日を待ちます。クラスごとに違うでしょう。曲も新たなものが増えてきますからね。わたくしにとって歌は自分をさらけ出すもの。思いっきり自分を表現できます。歌は遠慮してくれませんかから、ありったけの力で、心から歌っています。もう歌が無かったら、わたくしの人生無いでもんね。お付き合いでも、最初から全部をさらけ出します。自然体で、絶対嘘をつかないことです。

主人は今年82歳、出会いからお互いに伴奏をし合ってまいりましたね。旅行に行くのも一緒。邦楽も好きで、歌舞伎座に行くのも一緒。ほとんど一緒ですけど、ほんとに喧嘩はしません。仲良しの秘訣って、お互いあまり立ち入らないことですね。

新川沿いに火の見櫓や遊歩道ができ、春は家から桜が見られますよ。江戸川区に越して来て良かったなあと思います。これからもこの街でみなさんと一緒に、90歳ぐらいまで歌っていきなと思います。

